

聖書:ルカの福音書17章20～37節

説教:人の子の現れる日

はじめに

教会には営業目的でいろいろな会社から電話がかかってきます。そのうちのおよそ半分くらいが「ふくおんきょうかい」と読み間違えをするので「ふくいんきょうかいです」と訂正します。そして自分で言うておきながらこう考えるのです。「福音とはなんだろうか。」マルコの福音書1章14, 15節にはこうあります。「イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。『時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。』」罪を悔い改める者を神はご自分の国に迎え、罪を赦し永遠のいのちを与えてくださる。それが福音であると教えます。そうするとパリサイ人でなくても知りたくなります。神の国にいつ来るのか。どこにあるのか。誰がそこに入ることができるのか。ところがイエスの答えはいつものようにわかりにくい。特に37節のことばには皆さんも戸惑ったでしょう。どのようなことなのか。ともに考えてまいります。

1 神の国

1) 疑問①:「あなたがた」とは

1, 2節を読みます。「パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」

「あなたがた」とありますが、これは誰のことか。「あなたがた」とは罪を悔い改めて信じた人、と思ったかもしれません。でも、イエスは質問してきた「彼ら(パリサイ人)に答えられた」とあります。そうすると「パリサイ人のただ中にある」、そうも読めてしまう。これは意外です。パリサイ人はイエスを憎み十字架に追いやった人たち。神の国はそんな人たちのただ中にもあると言っている。それはどういうことか。これを疑問の①として、また最後に考えていきます。

2) ノアとロト

ところで、神の国が私たちのただ中にあると言われて、実感があるでしょうか。おそらくほとんどの人はない。なんとなく雲をつかむような世界に

感じで、まして私たちのいのちと関係があるとはあまり思えません。ところが、イエスはノアとロトの二つの事件を挙げて、神の国が私たちのいのちといかに大きな関係があるかを教えます。

ノアについてはよくご存じでしょう。人々が勝手な道を歩み地上に罪があふれるのをご覧になった神は、信仰者であったノアに箱舟を造らせ、ノアとその家族、そして動物たちをその箱舟に乗せて、さばきの日から救われるようにします。しかし他の人々は、さばきの日が来ることなど信じないでいつもと変わらずに食べたり飲んだりしていて、結局洪水に飲み込まれていった。

ロトもそうでした。彼が住んでいたソドムとゴモラの町に罪が満ちているのをご覧になった神は、その町に火と硫黄を降らせてさばきます。そのとき、正しい人であったロトとその家族は、御使いに手を引かれて救われるのですが、ロトの妻は逃げる途中、家のことが気になって後ろを振り向いてしまい、塩の柱になってしまいます。

神の国と聞けば、幸せに暮らせる天国のようなイメージを持たれるでしょう。でも神の国にはもう一つの面があって、神のさばきのときにノアが箱舟に入って逃れたように、神の国は神のさばきから逃れる唯一の場所という意味でもあるのです。またロトの妻を見てわかるように、神の国に入ろうか入らないか、どっちつかずということもあり得ない。どちらかをはっきりと選ばなければいけない。神の国は、私たちのいのちと深く関わっています。

3) 疑問②:これは脅かしなのか

でもどうでしょう。「あなたのいのちに関われる」と言われても、初めて聞く方にはピンとこない。「後で考えます」とか「友だちと相談してから」とかいろいろ理由をつけて、はっきり態度を決めたくない。それが本音です。ところがそうも言っていない。34, 35節。「あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝床で人が二人寝ていると、一人は取られ、もう一人は残されます。同じところで白をひいている女が二人いると、一人は取られ、もう一人は残されます。」

仲良く暮らしている家族が、さばきの日には救われる者とそうでない者がはっきりと分けられていく。いつまでも曖昧にしておくと、こんなことに

なる。だから一刻も早く神を信じて救われなさい。確かにそういうことではあるけれど、なんとなく脅迫されているような感じがしてしまいます。私はへそ曲がりなので、「いやだ」と言いたくなる。これは脅しなのでしょう。これもまた後で考えます。

2 イエス

1) 人の子の日

ところでパリサイ人たちが「神の国はいつ来るのか」と尋ねていたのに、22節になるとイエスは弟子たちに「あなたがたが、人の子の日を一日でも見たいと願っても」と言って、ここで初めて「人の子の日」という表現が出てくるのに気がついたのでしょうか。「人の子の日」という言い方は新約聖書の中でここにしか出て来ない。いったいどんな意味かと思って先を読んでいくと、どうもさばきのことと関係しているらしいのですが、どうしてこんなわかりにくい言い方をされるのでしょうか。

2) ご自分のことは控えめにしか言わない

わかりにくいと言えば37節がまさにそうです。「弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言うと、イエスは彼らに言われた。『死体のあるところ、そこには禿鷹が集まります。』」人の子の現れの日、一人が取られて一人は残される。そのようなことはどこで起こるのか。その質問に対して、イエスは「死体のあるところ、そこには禿鷹が集まります」と答えた。学者たちも意味がわからないそうです。どうしてわかりにくい表現をされるのか。

実は理由があります。イエスは弟子たちにこう言っておられました。17章10節。「自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」イエスは弟子たちに語るだけでなく、先頭に立って見本をお示しになったはず。イエスにとってすべては、なすべきことをしただけということですから、ごくごく控えめ表現になる。その結果、わかりにくくなる。37節もイエスご自身のことなので、わかりにくくなっている。

3) まず、人の子は多くの苦しみを受け捨てられる

そうするとこの「死体」とは誰の死体なのか。ヒントは25節です。「しかし、まず人の子は多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられなければならない。」

こうなると、お一人しか考えられない。多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられた方。イエス・キリスト。37節はイエスのご自分のことを語っていたというのはこういうことだったのです。

4) この時代の人々

ではその死体に集まる禿鷹とはなにを指すのか。十字架の周りにはだれがいたか。イエスを十字架に追いやった人たちが集まった。それが「この時代の人々。」彼らは禿鷹のように十字架の周りに集まりました。

集まっていたのはそれだけだったのか。二千年前のイスラエルの人々のことでしょうか。確かに人々は「十字架につけろ」と叫びましたから、そのとおりです。ではノアの時はどうだったのか。人々は神のさばきを信じないで、罪を悔い改めず、結局洪水に飲み込まれていく。彼らも「この時代の人々」でした。ロトのときもそうです。神のさばきを信じない人々の上にさばきが下り、彼らも「この時代の人々」に含まれる。では私たちはどうでしょうか。やっぱり「この時代の人々」ではないですか。どうしてか。私たちはイエスを十字架につけたのです。人の子の現れの日、罪ある人々は全員、神の子イエスを十字架につけ、この方が私たちの身代わりとなって神のさばきをお受けになりました。

3 人の子の現れの日

1) さばき：①主の十字架 ②再臨の日

人の子が現れる日、それはさばき日である、と言いました。ここで整理しておきたいと思います。聖書で「さばき」と言うとき、そこには二つの意味がある。一つ目は、いま見たように、主が十字架におかかりになってさばきを受けられる日。そして二つ目。最後の審判と呼んでいます。終末の日、主の再臨の日。私たちが天の御国に入れられる日。こんなふうに二つある。

2) 一人は取られ、一人は残される

その人の子の現れる日のことですが、その日に何が起こるか。31節から35節にあるように、その日、一人は取られ一人は残される。人の子の現れの日は二つあると言いました。そうすると、一人取られて一人残る、それは主の十字架のときと終末のとき、そのどちらにおいても起こることになる。こんなことを言うとなぜか質問があるはず。 「十字架の日、一人取られて一人残る、そんなこと起きたのか。聖書に書いていません。」

3) ただ中にある

よく考えましょう。一人が取られて一人が残る。なにか超自然的な力が働いて、隣にいた人が急にいなくなる。そんな光景を想像したかも知れませんが。そうではない。イエスは私たちの心の内側のことを語っています。

疑問の①として挙げたことですが、主はこう言われていたことを思いだしてください。「神の国はあなたがたのただ中にある。」あなたがたとは、信じている人ももちろんですが信じていない人のうちにもある、そういう意味だと言いました。だから全員が救われる、という意味ではありません。こういうことです。神の国の門は誰に対してでも平等に開かれている。そこに入るか、入らないのか、決めるのは誰か。自分で決める。

具体的に見てみましょう。主が十字架におかかりになった日、人々はどっちを選んでのでしょうか。禿鷹のように集まった人々は神の国に入ろうと思ったのか。いいえ。彼らはイエスをあざけりました。神の国の門を自らの手で閉ざしてしまいました。その結果どうなったか。一人は取り去られ、一人は残された。神がそうしたのではありません。自分の手でそうしたのです。

では最後に残っていた疑問の②について。一人は取られ、一人は残る。これは脅迫なのかどうか。もう答えは出ています。十字架の周りに集まった人たちは誰かに脅迫されていましたか。いいえ。自分の意志で集まって来た。むしろ脅迫しているのは群衆のほうでした。

ここを読んで、神は恐ろしい方だと最初は思ったかもしれない。よく考えたらそうではない。むしろ恐ろしいのは、神のひとり子を十字架に追いやった私たちの罪ではないですか。そんな私たちに対して主はどうされたか。どこまでもへりくだって押し黙る羊のようにして十字架におつきなつた救い主の御名をさがめます。